

平成19年度(2007年)

海外行政視察報告書

(ドイツ・オランダ)

平成19年10月16日(火)～25日(木)



見事に修理、保存されている美しい中世の街並み(ドイツ)

田原市議会
海外行政視察団

目 次

巻頭あいさつ	2
視察調査レポート	
【 ド イ ツ 】	
シュトゥットガルト再開発	3
フライブルクの環境（エコステーション）	5
フライブルクの環境（民間ゴミ処理施設）	6
ドナウヴェルトのクラインガルテン	7
ハールブルクのビオトープ	8
ローテンブルクの街並み景観	9
ヴェルツブルクの街並み景観	11
【 オ ラ ン ダ 】	
レリスタッド フラボランド有機農業センター	12
ロッテルダム ウォーターフロントにおける再開発	13
ドイツ滞在中の所感	14
オランダ滞在中の所感	15
田原市議会海外行政視察日程表	16
田原市議会海外行政視察団名簿	17
編集後記	18

巻頭あいさつ

田原市議会海外行政視察団

団 長 河 合 熙 人

我が国は今、人口減少、少子高齢化、グローバル化、構造改革、環境問題や情報化などこれまでに経験したことのない時代の変化の中で、新しい躍動の時代へと切り開いていかなければなりません。

こうした状況の中、将来をにらみ、構造改革によって実現される国のかたち、地方のかたちを明確かつ体系的に示すことが必要とされています。田原市におきましても多くの課題を抱えつつも半島一体となった事業が着実に推進されています。

また、田原市議会においても多くの課題解決と住民の幸福を目標にまい進しているところであります。

今回、多くの課題解決のため、環境先進国ドイツの都市再開発・観光施策をはじめオランダの有機農業等を熱心かつ積極的に視察して参りましたのでご報告いたします。

視察調査レポート

ドイツ

シュトゥットガルト再開発

10月17日(水)

・鉄道ネットワークと環境に配慮した都市開発について

シュトゥットガルト(Stuttgart)はドイツ連邦共和国バーデン＝ヴュルテンベルク州の州都で、ドイツ南西部の中心都市です。人口は約59万人、路面電車や都市近郊電車で直接繋がる近隣周辺都市を合わせて人口100万人を超える都市圏を形成しています。メルセデス・ベンツ社誕生の地でダイムラー・クライスラー、ポルシェやボッシュなど世界的な企業の本社がおかれるドイツ国内有数の商工業都市である一方、ぶどう栽培などの農業も盛んで、ぶどう畑や森に囲まれた緑豊かな田舎町の趣きも持ち合わせています。



現状のシュトゥットガルト中央駅

現在、シュトゥットガルトでは中央駅を基点とする近郊の鉄道網を抜本的に改革し、環境共生型の都市開発を行う「シュトゥットガルト21」プロジェクトが進められています。シュトゥットガルト中央駅は、ICE、インターシティなど特急列車が走り、国内はもとよりEU圏内、スイスの主要都市を結んでいます。駅は現在ターミナル式(終着駅)で、停車する列車はスイッチバック



地下化される中央駅の構想図

して目的地に向かっていますが、この駅を通過式の地下駅にして列車の接続の効率を上げるとともに、地下開発に伴い地上で空き地となる約100ヘクタールの土地を再開発する計画です。100ヘクタールのうち80ヘクタールは商業用地・宅地として3万人の居住人口増を目標としています。残り20ヘクタールは緑地として予定され、10年後の完成を目指しています。

私たち議員視察団が訪ねたのは、このシュトゥットガルト中央駅です。改札はなく、自由にホームに出入りできます。駅舎の時計塔が9層に分かれていて「シュトゥットガルト21」のショールームになっていました。私たちはそこで、完成後の駅周辺の立体パースや映像を見ながら、事業の全容についてドイツ鉄道の担当者から説明を受けました。シュトゥットガルトは、ネッカー川を中心とする丘陵地帯に囲まれた、すり鉢型の盆地に成立した都市です。19世紀後半より工業化が進み、ベンツやポルシェに代表される地域の商工業の発展に伴って、大気汚染が深刻化した経緯があり、現在は高齢化や外国からの流動人口増加等の今日的な都市問題が顕在化してきているようです。また、中心市街地の活力再生や都市機能の充実、交通機能の高度化にも対応するため、風や水の流れを考慮し、道路、緑地、公園、建築物等の再配置を含めた総合的な都市整備計画が考えられ、ドイツ国内で最大規模の環境共生型・都市開発事業として実施されているとのことでした。



シュトゥットガルト中央駅の時計塔

シュトゥットガルト中央駅の時計塔の最上部、メルセデス・ベンツの大きなエンブレムが回転しながら輝いていました。屋上は展望スペースになっていて、視察の最後に上りました。100ヘクタールの再開発地区と周囲の景色を目の当たりにして、「シュトゥットガルト21」プロジェクトを主体に行われようとしている都市気候に配慮した都市整備、都市緑化、そして屋上・壁面等の特殊緑化への取組みが理解できたような気がしました。遠目に見るなだらかな丘陵には木々が豊かに繁りブドウ畑が連なる



環境に配慮された街並み

(シュトゥットガルト中央駅屋上から)

なか白い家が点在し、眼下には新旧の建物が混在するなか緑の帯が続いていました。商工業都市として発展してきたこの都市の住民が、いかに緑豊かな住環境を大切に続けてきたであろうことを、美しいという言葉だけでは言い表せない景色を眺めながら都市計画の素晴らしさを再認識いたしました。

ドイツ南西部、フランスとスイスの国境に近く位置するフライブルク市の人口は約20万人で、石畳とゴシック建築の教会のある美しい中世の面影を残す町です。ドイツでは二番目に古い伝統を誇る大学もあり、学生数約2万人、学術的で若々しい雰囲気のある都市でもあります。それ故フライブルクは大学の街、ゴシックの街と言われ、



屋根に芝等を植え込んだエコステーション

また、バーデン・ワインの街とも言われています。

この市はドイツの他の都市に先駆けて環境行政を行い、それをまちづくりの柱とした新しい地域システムの開発(三国間のREGIOの政策)を進めています。

西側にライン川、東側にシュヴァルツヴァルト(黒い森)山脈を控え、美しい自然に恵まれたフライブルクでも、人間が自然と共生するエコポリスの実現に向けて様々な環境行政が行われています。ドイツで環境局という部門ができたのもこの町が一番初めで、現在では他局と共にフライブルク市内のみならず、バーゼル(スイス)・ミュールーズ(フランス)・コルマル(フランス)とも共同で地域システム政策(Regio政策)の核として、研究開発機関とも連携体制を取りながら対策を進めている環境先進都市です。

今回視察した「エコステーション」は1986年、フライブルクで行われた州庭園祭の際につくられ、最も自然に則したエコロジカルな建築様式をとり入れ、屋根は芝生におおわれたドームの自然の家と有機庭園からできています。

このステーションはドイツ最大のNGOのBUND(ドイツ自然保護環境連盟)の運営で、年間12,000人の子供たちに分かりやすい人形劇や体験を通して行政とは一線を画した環境教育を行っています。市からは場



人形劇を使った環境教育

所の提供のみで、運営費の補助はなく、NGO と行政とは対等で、別々の立場から環境教育を担っていこうとする考えとのことでした。

当日は市内の小学校の低学年の子どもたちが体験学習にきており、自然の家の中で、土の再生等について分かりやすい人形劇を見、土を手にした花植え体験等に目を輝かせていました。小さなときから体験を通して子どもたちが自ら考え、行動する力を養成していると感じました。



体験を通して学ぶ子どもたち



担当のラルフさんから説明を受ける

・フライブルク市内の民間ゴミ処理施設

10月18日(木)

フライブルク市では、空気汚染の配慮などから原則的に焼却法をとっていません。産業廃棄物でも、家庭ごみにおいても、基本的にはごみを出さない対策を前提にした処理法を検討しており、官民共同での対策をリサイクリングシステムに基づいたごみ分離収集システムにより処理しています。

市でごみを収集し、民間に処理を任せており、コンポストと熱源を再利用しています。一般家庭から出る食品残渣など基本的には、日本の処理方法と似ていましたが、市内の団地内に処理施設は建設されており、隣にはスーパーやレストランがあり、建設場所について理解ある市民の考えには驚嘆しました。

ここでは、コンポストとして土壌改良剤みたいな土を園芸農家や個人に販売し、メタンガス発電で売電し収益を上げています。原発を拒否し、環境を大切にする市民性を感じました。

ドイツ、バイエルン州のドナウヴェルト市(人口3万人)のクラインガルテンを視察しました。総面積は約8ha、全260区画、一区画あたり平均300㎡です。使用料は、年間1㎡あたり8セントで、水の使用料は実績に応じ年末に集金されます。

運営は市クラインガルテン協会が独自で実施し、市からは土地の提供のみです。協



協会本部でクラインガルテンについてのレクチャー

会は12人の管理メンバーで運営され、メンバーは他に職業を持つ完全なボランティアです。協会は完全に市からの自立を目指しており、機材の確保から、各種行事の企画運営まで様々な工夫を行いながら運営しています。

協会の運営にあたる財源は会員の会費が主であり、入会費が80ユーロ、年会費は28.5ユーロ、年会費の内12.5

ユーロはバイエルン州の上部団体に上納しています。

クラインガルテンの歴史は古く第2次世界大戦後まもなく開始され、当初は戦災等で食べるものも無く、特に貧民層の食料確保の目的で土地を提供したのが始まりです。現在では、様々な人種・職種の方々が憩いの場として利用しています。

この視察を行う前のクラインガルテンのイメージは、都会の方が週末にちょっと土いじりを行い、レクリエーション施設として休暇を楽しみ、そこには管理者がおり、それなりの維持管理を行い、そうすることで利用者は田舎暮らし・農業をほんの少し体験し満足を得るといったものでした。

しかし、今回視察したクラインガルテンでは、農園の管理など自分の責任において相当頻繁に通い、耕作をしなければならない様子でした。今、日本の状況ではそれだけ時間と覚悟を持って利用できる人がどれだけいるのか疑問ではありますが、今後増加する団塊世代の退職後の健康確保や、生きがい探しには、有効な事業となり得る可能性を感じました。



基本的ルールに従い、個々で管理

ドナウヴェルト市から北に、車で約15分のところにハールブルク市があります。ドナウ川の支流ベルニッツ川、そしてベルニッツ川を臨むハールブルク城の下の清流が今回のビオトープの視察場所です。

ハールブルク市は遠い昔、隕石の落下で出来た窪地の街と言われています。周囲はなだらかな丘陵地帯で、土壌は硬く樹木は少なく、農業には不向きです。経済的に利益の少ない羊の放牧に自然を守る観点から市で補助金を出しています。



スケールの大きなビオトープ

今回視察したベルニッツ川には、清流にしか生息しないバツハムシェル(小川貝)やビーバーが生息しています。

ドイツではビーバーが川に生息していましたが、川の汚染や乱獲により絶滅しそうになったため、ビーバーの住める川を取り戻そうとした活動(自然回帰)が、ハールブルクのビオトープです。

ビオトープとは川全体、森全体を指しており、我々の知る日本のビオトープとは、規模、取り組み内容ともに大きな違いがありました。

我々が見聞きしてきた日本のビオトープは、人工的な小川を作り、そこに水生昆虫などを住まわせるなどし、それらを観察などする環境教育の一環としての取り組みが主であったように思いますが、ドイツにおける活動は、全ての環境に対するものであるため、地域の環境保護と言ったほうが、理解しやすく感じました。

渥美半島はまだまだ自然豊かな土地柄です。ある区域をビオトープとして捉え、農村の原風景を復活する取り組みを行い、あるいは、クラインガルテン事業を行う際、それをビオトープとして位置付け、農村原風景の回復としてみてはどうでしょうか。

環境問題と経済等の発展は相反するところが多くありますが、環境問題への積極的な取り組みは観光産業復活に大きな成果をあげるとともに、これら環境保護の活動を子どもたちに早い時期から指導することで、将来子どもたちに「自然」と言う大きな財産を残していけると感じました。



中世の面影を残すハールブルク城

ローテンブルク（ローテンブルク・オブ・デア・タウバー）はロマンチック街道の北方部に位置し、バイエルン州ミッテルフランケン行政区アンスバッハ郡に属しています。人口は約 11,000 人で、市の紋章は赤い二本の塔をモチーフにしたものです。旧市街は 3.4km の城壁で囲まれており、城壁内には約 2,600 人が住んでいます。



伝説のマイスタートルクのヌッシュ市長役の市民

ローテンブルクの歴史は古く、西暦 970 年頃から街の形成が始まったといわれています。位置的にタウバー川と言う川の上の高台に街がつけられたため、正式名称のローテンブルク・オブ・デア・タウバーの名前がついたそうです。

第 2 次世界大戦の終戦直前にアメリカ軍の爆撃を受け、建造物の約 40% が損傷または破壊されました。損害の大部分は旧市街でも比較的新しい地域であったため、最も重要な記念建造物は、被害を免れました。復興に際しては、城壁 1 m 分の修復費用を一般に募ったところ、アメリカが多額の資金援助を行ったそうです。この時の寄付者の名前は、街を取り囲む城壁の内側の壁にレンガに刻まれ掲示されています。日本人の名前や企業名等も多く見受けられました。

街並みは見事に中世のままに復元されており、おとぎの国に迷い込んだかのようにです。家の壁の色を変える、植木を変えるなども全て市に届出をし、許可を得て行うそうです。住人がどのように感じているかは聞けませんでした。ドイツではどの町や村でも多かれ少なかれ、そのような景観に関するルールや慣習が、古くからあるそうです。現に農村部でも白い壁と赤い屋根の家がどこに行っても整然と並び、大変美しく保たれています。これもドイツ人氣質がなせる業かと思いました。

今回、市庁舎で、偶然ローテンブルク市の観光局長ケンプター・ヨハン氏に対



観光局長ヨハン氏から説明を受ける

面できました。そこでの説明では、市の収入の3分の1が観光税であり、年間に訪れる観光客は100万人を超えるとのことでした。

また、この日に「マイスタートルンク（見事な一気飲み）」の伝説的な史実物語のミニ儀式も体験させていただきました。

19世紀頃からすでに観光産業が発展したローテンブルクでは、古い歴史や伝統を大切にし、民族の誇りをいまだに持ち続けるとともに、古くからの観光行政からもてなしの心が育まれたと感じました。



城壁に囲まれた町、ローテンブルク



戦後、見事に復元された家々

ローテンブルクのみならず、ドイツの町はどこに行っても「きれい」でした。道路や建物にも日本のような看板や立て札の類はほとんどありません。また道路の雑草もほとんど無く、ゴミのポイ捨てもほとんど見受けられません。さらには、電柱が街中にはほとんど無いため、街が整然としています。

伊良湖岬などの観光地を抱えている本市も、その場所だけでも特別に、無駄な看板の取り外しや、見晴らしを確保するための雑草の刈り取りなど通年にわたって実施し、日本中に誇れる観光地づくりを実践すべきと思いました。



バイエルン州にあり、ヴュルツブルク市の人口は約 13 万人で、ロマンチック街道の出発点と言われています。中世より司教領としてメイン川を利用した水運とフランケンワインの集積地として栄えた街です。

ドイツのバロック建築を代表するバルタザール・ノイマンの設計による司教宮殿(レ



ジデンツ)、その庭園と広場は世界遺産に登録されています。また、礼拝堂には中世の彫刻家ティルマン・リーメンシュナイダー作のアダムとイブの彫刻があります。

ヴュルツブルク市は、第2次世界大戦でほとんど破壊されましたが、市の80%が教会の所有であったため、戦後忠実に復元された建物郡が、中世の姿を保っています。

また、メイン川に面しているため、川沿いの建物は1階部分をかさ上げし、堤防の役割を果たしていました。ドイツ民族の勤勉性と合理的な面を感じました。

メイン川湖畔の麗しき古都、ヴュルツブルク



戦災直後のヴュルツブルク市のジオラマ



メイン川の氾濫に備え、堤防の役割を持つ1階部分

オランダ

レリスタッド フラボランド有機農業センター

10月22日(月)

オランダは、九州よりやや小さな面積に 1,630 万人が住み、その国土の 3 分の 2 が海拔 0m 地帯です。

オランダの農業情勢については、各種の環境規制が強く、自然を維持し、管理していく役割が農業にも求められており、農業施策については、農産物の国際的な価格競争ができる効果的な農業の促進と、自然保護区、環境保全保護区域の規制により不利益に対しての補助金制度があげられます。

農村といわれる地域は国土の 80% でその人口は 40% である。オランダの土地利用は農地 58%、水域 17%、居住地 9%、森林 8%、自然保護区域 3%、その他 5% となっています。



フラボランド有機農業センターを視察

っています。

自然環境政策は 100 年以上の歴史があり、1991 年に自然再生政策で生態系のネットワークを取り入れています。

レリスタッド市は国のデルタ計画により堤防を建設し、湖水をくみ出して土地を作り出してから 50 数年が経過しています。この地域で当初は 24 戸

で 300 h a をバイオ(有機)農業専用用地としましたが、今日では、1 農家 80 から 120 h a の区画を国からリースしています。

フラボランド有機農業センターは新しい農業の研究部門であり、現在の農業における問題点の分析改良の中心となっているとの説明を受けました。

この後、バイオ農家のヨグマンさんを訪問し、バイオ農業の取り組み等について伺いました。彼によると農薬を使用しないバイオ農業では、手間が 3 割高とな



バイオ農業の取り組みについて説明

りますが、国の品質認証制度やバイオ農家に対する補助金等で経営は安定し、連作は

行わず、6年毎の輪作対策を行っているとのことでした。

また、所々に農家が建設し、売電をするたくさんの風車が建っていました。これは、エコエネ対策の一環として国から補助金が出ているとのことでした。

ロッテルダム ウォーターフロントにおける再開発

10月23日(火)

ロッテルダムは人口約58万人で世界第3位の貿易港です。ライン川、マース川、スヘルト川が北海へ注ぐデルタ地帯に発達した港湾都市です。

ロッテルダム港は拡大を続け、1973年には北海を埋め立て、石油埠頭やコンテナターミナルを建設しました。さらにその西側を埋立て、コンテナターミナルを建設する計画があり、2014年ごろの完成予定です。

今も運河や旧埠頭を国内向けに利用していますが、旧市街を再開発して住宅を増や



独創的な景観群が見られるロッテルダムの再開発地区

し、職住近接の施策を推進しており、都市計画の先進地だとつくづく感じました。

また、港湾施設は、30基余のガントリークレーン等が設置され、ロボットによる作業がされており、さすが世界第3位の港だとスケールの大きさに感心しました。



ロッテルダム港

ドイツ滞在中の所感

セントレアから空路 10 時間 10 分、フィンランドのヘルシンキ空港で乗り継ぎ、更に 2 時間 50 分、私たちは最初の視察国であるドイツ連邦共和国のシュトゥットガルト空港に降り立ちました。ヘルシンキで入国審査を受け、その後、出国審査をしないまま、シュトゥットガルトへの乗継便に搭乗したので何となく違和感がありました。これは、EU 加盟国間は国内線扱いとの説明を受け納得しました。実際、シュトゥットガルト到着後にドイツの入国審査はなく、いきなり EU を実感しました。

私たちの視察はドイツ南西部、フランスとスイスとの国境に接するバーデン・ヴュルテンベルク州の 2 都市シュトゥットガルトとフライブルクに始まり、その後、東隣りに位置し、オーストリア、チェコとの国境に接するバイエルン州に移動。ミュンヘンからロマンチック街道を北上しハールブルク、ネルトリンゲン、ローテンブルク、ヴュルツブルクを訪ね、ヘッセン州のフランクフルトに至る、南・中部ドイツの 3 つの州の 7 つの市町、全行程約 1,100km を 5 日間で巡る、多彩で充実感あふれる有意義なものでした。



ローテンブルク（聖ヤコブ教会）

ドイツは連邦制の共和国です。16 の連邦州から成り、それぞれの州が憲法を持ち議会と州政府を持っています。面積は約 35 万 7 千 km^2 、人口は約 8,243 万人。日本の面積の 94% 程の国土に、日本の人口の 65% 程の人々が住んでいることとなります。人口 100 万人以上の都市はベルリン、ハンブルク、ミュンヘンなど少数で、首都ベルリンの人口でも約 340 万人です。一極集中の都市がなく、地域主権が確立された地方分散型の社会は、ドイツの大きな特徴のひとつだと思いました。

南端のアルプス山地から北海とバルト海に面した北部低地まで南北に広がるドイツの地勢は、中部の山地を除けば、全国土がまるで平らな土地のようです。国土の 30% は手入れの行き届いた森林だそうで、森林が溜めた雨水をゆっくりはき出すので、ドイツの河川は年間を通じて水量が安定しています。

この国の印象は、広告看板が少なく、伝統と豊かな自然を大切にする環境国で、都市計画の発達した国だとつくづく思いました。

オランダ滞在中の所感

オランダのスキポール空港に着いた時、ドイツよりも北に位置するのに暖かく不思議に思いましたが、南へ行く程アルプス山脈に近づくため、気温は下がるとの通訳のことばを思い出しました。宿泊先へ向かう道中、街並みを見て日本と大きく異なるのは、ドイツ同様電線が見当たらないことでした。

アムステルダムは、船での流通で栄えた都市だけあって、川だらけ、橋だらけという印象でした。さらに、路面電車、車道、自転車専用道、歩道に分けられてはいますが、バスの中から見えていても、慣れないと安全とは言えない感じがしました。特に自転車専用道は、歩行者との接触があった場合でも歩行者に責任があるとのことでした。人口 1,630 万人のオランダで、自転車の総台数が 1,800 万台を越えるほど自転車が多い国でした。



自転車だらけのアムステルダム

中央駅から王宮のあるダム広場までの、ダムラック通りに立ち並ぶゴシック的建物には目を奪われましたが、現在ではそのほとんどの建物が、ホテルや、デパートになっていて看板だらけというイメージでした。ここは、アンネ・フランクの家、ゴッホ美術館、国立博物館など数々の名所があり、世界中から多くの観光客が訪れるのも納得できると感じました。

ロッテルダムの街並みは、アムステルダムとは違い、建築家が競って独創的で近代的な建物を建てており、サイコロを並べたような、見るだけで楽しくなるような建築物もありました。

アムステルダムからロッテルダムへの移動中、面白い話を聞きました。「オランダは船で栄えた国だから、今でも車よりも船が優先する。高速道路に橋があるが、船が通ると橋が上げられ、その間、高速道路は遮断されてしまう。」とのことでした。

生活環境はドイツでも感じましたが物価が高く、特に飲み水用のミネラルウォーターに高いお金を払うのに違和感がありました。

また、オランダといえば風車を思い浮かべますが、現在、日本でも増えている発電用の風車が多く、ドイツ同様、自然・環境を大切にする国であることを実感しました。

【田原市議会議員海外行政視察ドイツ・オランダ8泊10日】

日次	月日(曜)	地名	現地時間	交通機関	行程
1	10月16日 (火)	中部(セントレア)発 ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 シュトゥットガルト着	11:00 15:10 16:55 18:45	A Y 8 0 A Y 3 9 0 7	空路、ヘルシンキへ ＜シュトゥットガルト泊＞
2	10月17日 (水)	シュトゥットガルト フライブルク	終日	専用車 (217km)	シュトゥットガルト再開発地区視察 ・中央駅の地下化及び鉄道ネットワーク ・地上の中心地区の環境を配慮した開発 昼食後、フライブルクへ移動 ＜フライブルク泊＞
3	10月18日 (木)	フライブルク ミュンヘン	終日	専用車 (347km)	フライブルク環境視察 自然と環境の保全に貢献したまちづくり 昼食後、ミュンヘンへ移動 ＜ミュンヘン泊＞
4	10月19日 (金)	ミュンヘン ローテンブルク	終日	専用車 (387km)	ドナウヴェルト観光局へ 景観を保存した街づくり・都市計画・グリーン ツーリズム等 ネルトリンゲンで昼食後、ローテンブルクへ ＜ローテンブルク泊＞
5	10月20日 (土)	ローテンブルク	終日		ローテンブルク視察 現地ガイドによる現存する12世紀の市壁 や町再建で破損した部分の修復復元を視察 ＜ローテンブルク泊＞
6	10月21日 (日)	ローテンブルク ヴェルツブルク フランクフルト発 アムステルダム着	午前 午後	専用車 飛行機	ヴェルツブルク視察 街並み視察(アルテマイン橋・マリエンベル ク要塞) 昼食後、フランクフルトへ 空路、アムステルダムへ ＜アムステルダム泊＞
7	10月22日 (月)	アムステルダム レリスタッド アムステルダム	終日	専用車	フレポランド有機農業センター視察 (レリスタッド) 昼食後、レリスタッド市内視察 ＜アムステルダム泊＞
8	10月23日 (火)	アムステルダム ロッテルダム アムステルダム	終日	専用車	「コップ・ファン・ザイド」ウォーターフロント視察 (ロッテルダム) 昼食後、アムステルダム市内へ 午後：アムステルダム市内を視察 ＜アムステルダム泊＞
9	10月24日 (水)	アムステルダム発 ヘルシンキ着 ヘルシンキ発	11:55 15:20 17:15	A Y 8 4 2 A Y 7 9	ご朝食後、ホテルを出発。一路空港へ 一路、ヘルシンキへ 一路、中部国際空港へ ＜機内泊＞
10	10月25日 (木)	中部(セントレア)着	08:55		入国審査後、田原へ

愛知県田原市議会海外行政視察参加者名簿

愛知県田原市議会

役職名	氏 名	党派別	備 考
視察団団長	かわい ひろと 河合 熙人	無所属	
視察団副団長	まつみ きよし 松見 清	無所属	
	おやいづ やすひろ 小柳津 保弘	公明党	
	すずき たつし 鈴木 達司	無所属	
	まき しょうご 眞木 正五	無所属	
	こくぼ よしみつ 小久保 喜光	無所属	
	もりやま かずゆき 森山 和幸	無所属	
	あかお まさあき 赤尾 昌昭	無所属	
	おおた ゆきお 太田 由紀夫	無所属	
	きたのや かずき 北野谷 一樹	無所属	
議会事務局長	かこ つとむ 加子 勉		



ドイツ連邦共和国(Federal Republic of Germany)



オランダ王国(Kingdom of the Netherlands)

編集後記

我々、海外行政視察団は、まだ暖かさが残る 10 月 16 日から 10 日間の日程で中世の時代が目に見えるドイツとオランダを訪問しました。

ドイツは、第 2 次世界大戦で、多くの町が破壊されましたが、その中から、見事な復興を成し遂げるなど、日本の戦後の復興とオーバーラップするところがありました。そこに住む人の力を肌で感じながら、自然を大事にする環境教育や素晴らしい都市計画等を視察することができました。

ドイツ到着後、寒さの厳しい中、朝と夜に宿泊先のホテルの周りを散歩しました。その中で復元された中世の街並みにふれ、日本では感じるできないロマンチックな気分を味わえました。何だか自分がドイツ人になったような気もしてきました。

都市間の移動につきましては、アウトバーンをバスで走行しましたが、道路工事での渋滞の列に度々遭遇し、期待していたような高速感はありませんでした。

視察団 11 人はけがもなく、元気でオランダへと移動しましたが、バスの車窓からは昔の風車よりも新しい風車（風力発電）が大変多く、イメージと掛け離れており、違和感を感じる場所もありました。

フラボランドの有機能農業栽培やロッテルダムの大規模な港の視察においては、日本とは比較にならない規模の大きさや、直接農家の方の話も聞くことができ、「自立した農業」や「土地の有効利用」など参考になりました。この国も環境を大切にした施策や都市計画の素晴らしさを感じました。

今回の視察におきましては、おおむね天候にも恵まれ、ひとりの病人も出ず、有意義にスケジュール通り視察を終えることができたことに感謝いたします。また、多くの教訓や知識を与えていただいた両国の方々に敬意を表すと共に我々はその教訓や知識を生かしてまちづくりに取り組んでいくことを追記し、報告いたします。

**海外行政視察報告書
(ドイツ・オランダ)**

平成19年12月

編集/発行 田原市議会海外行政視察団